

**オペラ**  
**アヴァンシュ・オペラ**  
**・フェスティバルの**  
**《トロヴァトーレ》**

古代ローマ時代の野外劇場はスイスにもあり、ベルン近郊の高台の村、アヴァンシュでも'95年からオペラ・フェスティバルが開かれている。当時の最新気象学を駆使して、天候の不安定なスイスでも一番雨の降りにくい場所に劇場を建てたというが、今年は《トロヴァトーレ》プレミアが雨で流れてしまった。その上ルーナ伯爵を歌うはずであったヌッチも結石でキャンセルと、ハブニングが続いたが、筆者が訪ねた7月12日は、悪天候が功を奏した。雷鳴のようなオケの演奏が始まると、一緒に本物の雷が鳴り出し、1幕幕切れの戦いの場面や、アズチーナの回想シーンで炎に人形を投げ入れると、後ろに稲妻が走るという効果付きであった。

アルゼンチンの指揮者パチッティの棒は無難だったが、日本の聴衆の記憶に新しい歌手が並んでいた。9月にフィレンツェ歌劇場来日公演でカラブを歌うジョルダニは急病だったが、第2キャストのボルタは瑞々しい声で、高音にチェンジした後に独特の安定感があり、最後のアリアのC音が完璧な美声ではなかった以外は、好演した。N響のヴェルディ《レクイエム》で'01年来日したパスのデ・グランディスは、フェッランドのアリアでの速いパッセージも高音もこなし、表現にもメリハリがあった。同じくN響や読響で来日しているマルフィージは、レオノーラには細い声色ではあるが、本来のヴェルディ・レガートを聴かせ、多くのレオノーラが危ういアジリタや高音を難なくこなし、安心感があった。そして、ボローニャ歌劇場来日公演でルーナ伯爵を歌ったガザーレが、来日直前インタビュー時に歌ってくれた通り情熱的にアリアを歌い上げ、レオノーラを純粹に愛する伯爵を熱演し、ライヴァルというより応援したくなるような伯爵であった。彼の妻のムンガも、表現に細やかさが欠けるが、安定して音域の広い胸声を生かして、迫力のあるアズチーナを聴かせてくれた。来年はこの音楽祭の人気演目《アイーダ》に戻る。

スイスで避暑がてらオペラ観劇というのも悪くない。(中 東生)

